

平成30年度学校自己評価表（最終評価）

中長期目標 (学校ビジョン)	克己の徳を備えた人間力豊かな生徒の育成 (1)高い志と自ら学ぶ力 (2)確かな学力と公共の精神 (3)自らを律する力と他を思いやる心 (4)率先して行う勇氣と協力して成し遂げる知恵 (5)健やかな体と感動する心
--------------------------	--

今年度の重点目標	1 学力の向上 (1)授業規律と学習習慣の確立 (2)力をつける授業、生徒が主体的に取り組む授業の工夫 (3)「地域探究の時間」の発展 2 自主性と自律心の育成 (1)基本的学習習慣の確立 (2)主体性を重視した生徒会活動、学校行事の充実 (3)文武両道を目指した部活動の実践 3 コース制の魅力化 (1)コース制の発展・充実 (2)キャリア教育の充実 4 学校における安全確保
-----------------	---

評価基準 A:十分達成 (100%) B:概ね達成 (80%程度) C:変化の兆し (60%程度) D:まだ不十分 (40%程度) E:目標・方策の見直し (30%以下)

評価項目	具体項目	目指す姿	年度当初		評価結果	
			現状	具体的方策	経過・達成状況	改善方策
授業規律と学習習慣の確立		○授業規律が確立されており、どの生徒も授業を大切にし、真剣に授業に取り組んでいる。 ○予習や復習、課題に取り組むなど学習習慣が身につけている。 <指標>教員アンケート「生徒が授業に集中して取り組んでいる」の評価AとBと合わせて60%以上。	○おおむね授業規律は良い。また、始業時間に遅れる生徒や授業の用意が不十分な生徒も減ってきた。 ○数は少ないが、授業の予習や復習をしていない生徒や、授業に集中しきれない生徒が見受けられる。	○評価方法の変更を周知し、徹底する。平常点も重視されることから、教師が授業開始時間を必ず守り、チャイムとともに授業が始まるよう生徒に指導するとともに、教材などの持ち物についても確認する。 ○予習・復習の指示を具体的に示し、提出物についてもこまめに確認する。また、気になる生徒については面談や関係職員と連携し対応する。 ○生徒が授業に集中できる環境づくりを行う。そのために、学年会・教科会・支援会議等で情報交換を行い生徒理解に努める。	○1学期末・2学期末の評価で、教員が小テストや提出物、授業への取組などを細かく評価し、成績不振者を指名課外補習等で指導した結果、授業への取り組みのペースをつかみ、成績不振者が減少・限定されてきた。 ○授業に集中できる環境づくりについては教科会や学年会、職員会議で共有できており、発達面等で気になる生徒の成績や授業の様子なども相談室が中心になって個人面談等を踏まえた研修会を持ち、全職員が共通理解を図って指導を行うことができた。	B
	学力の向上	○教科の基礎基本が定着しており、学習効果が高い授業により、学力を高めている。 ○授業が工夫されており、主体的に学習に取り組んでいるので、学ぶ力が高い。 <指標>生徒アンケート「授業に満足している」、「自分で勉強を進めようとしている」の評価AとB合わせて80%以上。	○生徒の基礎学力に差がある中、その向上に努力している。 ○公開授業などを通して授業の工夫を共有し、生徒の学力が十分に定着できるよう努力をしている。 ○授業におけるiPadの利用やClassiの導入等で、授業の進め方を変えつつある。	○授業中の発問や内容を絶えず検証し、授業力の向上に繋げていく。 ○授業と並行して基礎学力を高めるために、生徒一人ひとりの学力を見極め、個別の課題を与えていく。 ○個別指導等により、弱点の強化を行い、その上で、授業内容を高めていく。また、それらの内容については各教科会や校内の委員会等で検証していく。	○校内で研究授業・公開授業を行うとともに(国語・地歴・英語ではアクティブラーニング研修も実施した)、校外の研修会にも出向き、各教員が授業改革に取り組んだ。 ○3年生の理系では、理Ⅲ類型・理Ⅱ類型に分けたカリキュラムを実施し、目標を絞り込んだ授業をすることができた。 ○授業におけるiPadの利用が増え、またClassiが導入された1年生では生徒一人ひとりの状況を見極めながら課題を配信するなど、ICT教育に取り組むことができた。	B
	「地域探究の時間」の発展	○2年生を中心に全校生徒が「地域探究の時間」に取り組む、地域に関する関心が高まっている。 ○探究力、分析力、問題解決能力、コミュニケーション能力を高めている。 ○第3回「地域創造ハイスクールサミット」を開催し、参加生徒が充実した研究協議を行う。 <指標>地域創造ハイスクール・サミットでのアンケート結果において、提言や研究協議の充実が評価されている。また、「地域探究の時間」の研究発表での探究学習力、プレゼンテーション力などが高まっている。	○1年次のオリエンテーション等での経験を通して探究学習の手法や協同学習の経験を積んでいる。地域への関心は高まりつつある。 ○「地域創造ハイスクールサミット」を経験しているが、地域探究の時間の学びをどのような形でプレゼンテーションすべきかが計画できていない。 ○事前アンケートの結果を昨年度作成した「地域探究の時間」で身につけたい力(TMT)の評価基準表(ルーブリック)で見ると不十分な状況にある。	○地域の講師の方々との連携を密にとりフィールドワーク等の一次データを重要視した活動を促す。また、学校と地域が互いの強みを活かした教育活動を展開する。 ○生徒と担当教員と地域講師が連携を密にし、プレゼンテーションまでの流れを意識し、計画的な活動を行う。また、サミットの実施要項を早期に作成し、実行委員会等の立ち上げを早めるとともに、前回の反省を活かし、ワークショップや生徒交流会を充実させる。 ○TMTルーブリックレポートを活用し、生徒にも目標とする姿がわかる授業を展開する。教員・講師ともに各授業にて重点項目を意識した教育活動を行う。	○各グループの講師の方々との連携において、時間不足が原因で活動の打ち合わせが不十分となるグループがいくつかあった。 ○ハイスクールサミットへ向けての準備は、昨年度の実践を活かし生徒を巻き込んだ実行委員会を早期に立ち上げ計画的に準備にとりかかることができた。 ○TMTルーブリックレポート、事前事後アンケート調査の活用によって、生徒の意識の変遷がわかり、年度をまたいできめ細かい教育活動につながっている。	B
基本的学習習慣の確立	○生徒の基本的学習習慣が確立されており、マナーやモラルを守って落ち着いた生活できている。 <指標>遅刻者数の減少。頭髪・服装指導対象者数の減少、問題行動発生件数の減少。	○昨年度は、遅刻者数が多く、問題行動に対する指導を行う場面もあった。今年度は、基本的学習習慣の確立・遅刻の減少・公共マナー等の徹底に向けて、学校を挙げて取り組もうとしている。	○5Sの徹底。(整理、整頓、清掃、清潔、躰) ・遅刻・服装・不要物など各指導票を活用する。 ・教室や公共の場所からの私物の撤去及び整理整頓を徹底する。 ・基礎・基本の徹底等、SHRなどでのタイムリーな指導を行う。	○校内規定の遵守についてはおおむね良好であるが認識の甘い生徒もいた。遅刻は昨年より増えた。スマホの使用規定違反者は減少した。 ○5Sの励行により、教室整備もや改善したが、クラスや場所によって差があり、さらなる意識の改善が必要な部分が残った。 ○公共マナーの指導や道徳的説諭を粘り強く行い、不十分な点もあるが地域からの苦情も減少した。	C	
自主性と自律心の育成	○どの生徒も生徒会活動に主体的に参加し、成功体験を通して達成感を高め、人間力を向上させている。 ○どの生徒も学校行事に積極的に関わり、達成感を得ることで、他者との協調性や思いやりを身に付け、学校生活を有意義に過ごすとともに、人間力の向上が見られる。 <指標>生徒アンケート「学校行事に積極的に参加している」で評価AとB合わせて80%。また、生徒アンケート「本校の学校行事は充実している」の評価AとB合わせて85%以上。	○生徒会執行部の「北栄町高校生議会」参加をはじめ、応援リーダー・各委員会活動も含めた生徒会活動に主体的に参加し、充実した取り組みをする生徒が増えている。 ○育英祭・球技大会では生徒会執行部・実行委員が中心となり、全校生徒、特に下級生をよく指導し、運営することが出来ている。	○生徒会執行部が、育英祭や球技大会といった独自の活動だけでなく、生活委員会・環境委員会などと連携し、自治活動を活性化させる。 ○生徒会執行部・育英祭実行委員が企画運営に関する説明を丁寧に行い、各生徒が自分の努めを自覚し、自主的に活動できるようにする。 ○学校行事が生徒の力となるよう、行事の目的を理解する機会をもつとともに、生徒自身も行事等における各自の役割を積極的に果たす。	○生徒会執行部は、執行部会での生徒会顧問を交えた話し合いなどを通じ、生徒総会・球技大会の運営やあいさつ運動、卒業式に向けた取り組みなど主体的に活動することができた。 ○今年度育英祭実行委員は、荒天により計画を一部変更したものの、全校をよく指導して育英祭を成功に導くことができ、3学期には来年度の実行委員も、積極的に計画立案等の取り組みを始めることができた。 ○球技大会は育英祭と同様に、生徒の意見を取り入れるとともに、各部活動との連携も密にして運営することができた。	B	
文武両道をめざした部活動の実践	○全校生徒が部活動に積極的に参加し、活発で質の高い活動により、県大会優勝など高い実績を上げている。 ○スポーツ重点校の生徒として、トップアスリートを目指し高い意識をもって日々鍛錬するとともに、学校生活においても自らを律している。 <指標>県大会優勝6部。全国大会出場6部。	○多くの生徒が部活動に参加し、活発に活動している。(昨年度実績) ・部活動加入率全体94% 県大会団体優勝4部、全国大会への出場は8部	○定期的に部活動加入状況をチェックし、未加入者への声かけをする。(総体明け・夏休み明け・新人戦明け) ○生徒会執行部・応援団を中心に各部の活動を応援するとともに、結果についても、幅広く広報していく。 ○トップアスリート育成関連事業を活用し、各部活動において練習方法等の改善を行い、競技力向上に努める。 ○部活動において週1回休養日を設ける月間計画を作成し、実施する。	○部活の加入率は、1年が96%、2年が95%、3年が84%、全体では92%と高い加入率を維持し、充実した活動を行った。 ○部活動では、各部ともよく努力しており、4つの部が県大会優勝を、7つの部が全国大会出場を果たした。 ○部活動の実施にあたっては、各部とも活動計画を立案し、計画的に休養日を設けて活動した。	B	
コース制の発展・充実	○体育コースは高い競技力と実績を活かして、卒業後も次のステージでも活躍するために上級学校等へ進学する生徒を育成している。 ○普通コースは、上級学校への進学等、進路実現を果たすための学力と人間力をしっかり身に付けた生徒を育成している。 <指標>学校生活や行事の中で、リーダーシップを発揮し企画運営なども自主的に行なう生徒が増えている。また、国公立大学10%以上、私立大学20%以上、就職率100%の進路実現を達成する。	○体育コースの上級学校進学者は、例年半数程あるが、そのうち競技を継続する生徒は若干名である。 ○昨年度の国公立大学現役合格者は4名で前年度の8名を下回った。また、昨年は体育コースからの国公立大受験者・合格者がいなかった。 ○普通コースでは、進路面談等きめ細かい指導が行われ、安易な進路決定をしない雰囲気醸成され、取組が充実しつつある。	○体育コース集會を開き、体育コースの一員として、自覚ある行動及び習慣を身に付けさせる。 ○体育コースの取組である「異年齢交流」や「各種実習」において人間性や協調性を養い、競技力向上にも繋げていく。 ○高校で競技を終えることのないよう、更なる可能性を見出す指導と高い志の育成、将来指導者となる人材の育成を行う。 ○特進クラスの実質化に取組み、国公立大を希望する生徒を増やし、意識付けと実力養成を図る。そのために、教材、進路、面談などきめ細かい指導の充実を図り、魅力あるクラスにする。また、体育コースも毎年国公立大合格者を出せるよう、高い目標の設定ができる指導を行う。	○新規事業の「トップアスリート講演会」「メンタルトレーニング講演会」「環太平洋大学宿泊研修」を行い、アスリートとしての意識ができてきた。 ○各種交流や実習を通じて、人間性や協調性は徐々に養われてきており、これらの経験が生かされ、競技力向上や将来の進路にも繋がった。 ○学年集會、体育コース集會などの場やクラスでの個別面談などで意識付けが丁寧に行われている。 ○特進クラスの授業では、より高い目標を見据えた授業ができた。 ○全教職員協力のもと、国公立大等を目指す生徒の放課後課外や推薦入試事前指導を例年通り丁寧に行うことができた。 ○平成32年度以降の教育課程について、生徒の中長期の希望や大学入試の動向を見据え魅力的なクラス編成とすべく検討を進めることができた。	B	
キャリア教育の充実	○体系的なキャリア教育が進められており、生徒は、低学年から将来を考え、目的意識をもって進路実現に努めている。 <指標>生徒アンケート「明確な進路目標を持っている」評価AとB合わせて80%以上。	○生徒アンケートの結果は概ね指標を満たした状態で推移している。しかし、実態として、目標達成へのアプローチがイメージできず、具体的な行動に移せない生徒や、目標を下げてしまう生徒の姿も見受けられる。	○生徒の視野を広げると同時に、早期に具体的な将来設計を描くことができるよう働きかけを行う。また、それぞれの時期における指導テーマを明確に生徒に伝えた上で、組織的に進路指導を行う。 ○適切な目標設定をさせるため、進路面談を繰り返し行う。その際、生徒の志望や思いを引き出しつつ、具体的な目標モデルを提示することを心掛ける。	○各学年とも進路検討会などを通じて進路指導方針を共有することができた。その上で進路目標に応じた適切な科目選択や、学習意欲の向上、将来を考えるための刺激など、それぞれの時期に応じた進路指導を、高い志望を維持させながら行うことができた。 ○各担任を中心に丁寧に面談指導を行うことができた。また、職員の意識を揃えながら模試結果などを生徒にフィードバックし、進路面談の中に活かすことができた。	B	
学校における安全確保	○部活動や様々な学校教育活動において安全対策が徹底されている。 <指標>学校における事故の減少、救急救命講習への教職員・運動部員の参加率100%。	○ほとんどの部活動や体育の授業で、安全への意識の向上と安全対策の徹底に取り組んでいる。上記以外の学校生活全体においても、事故防止のために安全対策の徹底に努めていくことが必要である。	○教職員及び運動部員対象の救急救命講習を複数回実施し、全員参加することができた。 ○校内危機管理マニュアルの見直しを行い、安全対策の再点検を行うとともに、その周知を図る。	○救急救命講習については12月に実施し、教職員・運動部員は全員受講することができた。 ○学校危機管理マニュアルの見直しと決定事項の周知徹底を進めることができた。 ○校内にAED2台を追加購入し、既存のものあわせて4箇所を設置することができた。 ○災害発生件数が昨年度から半減した。	A	